

活動報告書 2023



未来につながる「最後の社会貢献」

貴方の「思い」を のこす遺贈へ

貴方の「思い」をのこす遺贈へ

遺贈寄付サポートセンターからのご挨拶

2023年度は、コロナ禍で過ごした空白の日々を取り戻すように世界中の人々の活動が活発になった年でした。遺贈寄付への理解促進活動も活発に行われ、私たちが全国各地でセミナーを開催し、海外の著名人を招いたシンポジウムを開催しました。メディアにも取り上げられ、利他の心を以て社会貢献に携わることの意義について、多くの方に賛同いただきました。ここに2023年度の日本財団遺贈寄付サポートセンターの活動をご報告いたします。

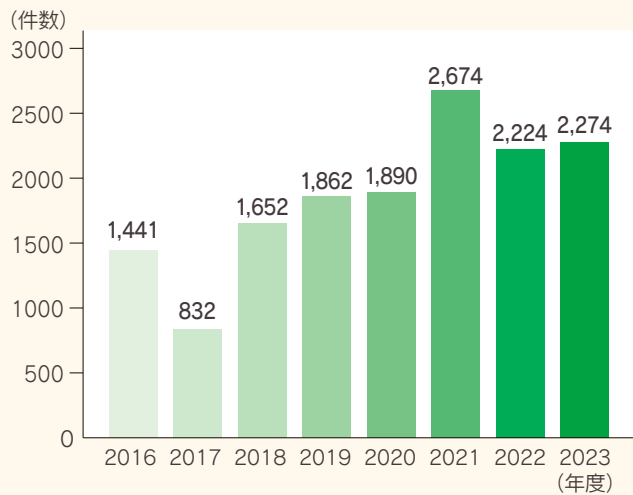
日本財団遺贈寄付サポートセンターの相談員が皆様の尊いお気持ちを伺う相談活動は、9年目を迎えました。お一人おひとりの思いを未来につなぐために、これからもそれぞれの方の大切な思いに寄り添いながら丁寧にご相談を承って参りたいと思います。

日本財団遺贈寄付サポートセンター 木下園子

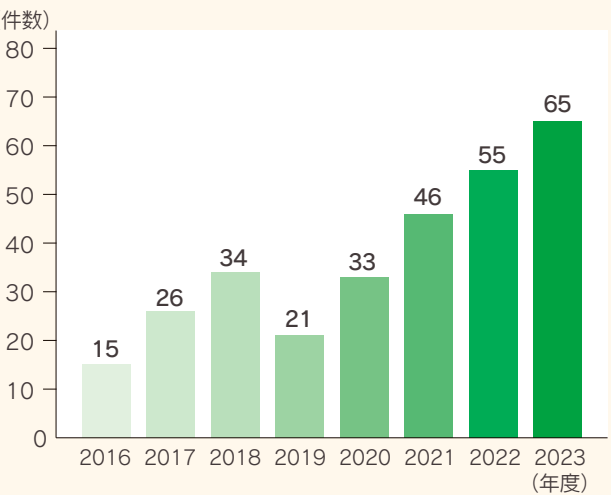
2023年度
寄付実績

遺贈寄付	808,455,879円<11件>
相続財産からの寄付	7,200,000円<3件>
信託による寄付	695,562円<1件>

お問合せ件数の推移



遺言書受領件数の推移



活動のご報告
CONTENTS

事業実施報告

- レポート1 「子ども第三の居場所」への訪問型体験機会の提供 P.4
- レポート2 アスリート・スポーツを活用した子ども未来創造 P.5
- レポート3 発達特性や虐待トラウマ等を持つ小学生を対象としたフリースクールの建築 P.6
- レポート4 看護師・介護士対象のユマニチュード・ケア技術研修 P.7
- レポート5 能登半島地震における水循環型シャワーの配備事業 P.8
- レポート6 日本財団 夢の奨学金 P.9
- レポート7 高齢者のための「もうひとつの家」の整備 P.10
- レポート8 能登半島地震に関わる支援活動（一財日本笑顔プロジェクト） P.11
- レポート9 使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクト『HEROs PLEDGE』 P.12

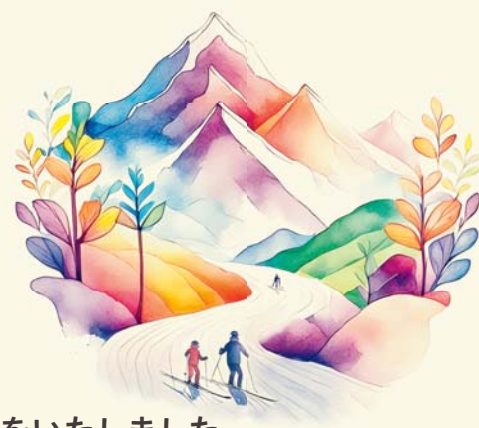
その他の活動

- ① シンポジウム「人生100年時代における幸福感を考える」 P.13を開催しました
- ② 全国で「遺言・遺贈セミナー」を開催しました P.14
- ③ 第8回 ゆいごん川柳キャンペーンを実施しました P.15

「子ども第三の居場所」への訪問型体験機会の提供

事業内容

「子ども第三の居場所」に通う子どもたちに、様々な体験や交流の機会を提供するための支援をいたしました。



家庭が抱える困難が複雑化し、地域のつながりも薄れる中、子どもが安心して過ごせる居場所がなく孤立するケースは少なくありません。日本財団はすべての子どもが安心して過ごせる「子ども第三の居場所」づくりを、運営ノウハウ提供や資金助成で支援し、全国199拠点（2024年1月末現在）で展開しています。第三の居場所で子どもたちに様々な体験をしてもらうための事業を、アスリートや著名人らの協力を得て実施しました。この体験事業に、相澤誉子様の相続財産寄付などが活かされています。

2024年3月、雪に触れたことがない沖縄県うるま市の子どもたちが、長野県でスキーを体験しました。第三の居場所を利用する子どもたちです。最初は不安そうでしたが、スノーボード元日本代表の成田童夢さん、プロスノーボーダーの荒井daze善正さん、藤沼到さんのサポートで2時間後にはみんな滑ることができるようになり、リフトにも挑戦しました。「また来年も滑りたい!」という声は、この日がかけがえのない思い出になったことを示しているでしょう。

このほかにも2023年6月に千葉県茂原市で、ジェフユナイテッド市原・千葉で活躍した元プロサッカー選手の近藤直也さん、カレン・ロバートさんと「ウォーキングフットボールイベント」をするなど全国で約20回、専門講師によるワークショップを実施しました。体験や学びにも経済的貧困などが影を落とし「経験格差」が広がるだけに、今後とも多くの体験や人とのかわりがある場をサポートしていきます。



本事業はM様からの遺贈寄付と、相澤誉子様、K様、K様の相続財産寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／11,860,000円（支援額11,860,000円）



アスリート・スポーツを活用した子ども未来創造

事業内容

アスリートによる社会貢献活動「HEROs」プロジェクトを推進する中で、子どもたちに様々な体験をしてもらう機会の提供の支援をいたしました。



日本財団は、アスリートによる社会貢献活動「HEROs」プロジェクトを推進しています。アスリートの活動は、スポーツでつながる多くの人たちの関心や行動を生み、広げていくチカラがあるからです。

プロジェクトには大きく3つの柱があります。まずはアスリートの皆さんに「スポーツをしてきたからこそ社会にできることがある」と自身の可能性を認識してもらうこと、実際に活動の場を提供すること、その活動を評価して社会から注目を集めること、です。この活動の場として、子どもたちに様々な体験をしてもらう機会の提供があり、遺贈寄付が活かされています。

例えば、ラグビーの五郎丸歩さんとバドミントンの潮田玲子さんが、こどもデイサービスを訪問。難病や障害のある子どもたちが家族と一緒に遊べるようにと、五感を使って遊べるおもちゃ70種類を手渡して一緒に遊びました。

バレーボール元日本代表の益子直美さんが「勝ち負けよりものびのびプレー」を重視して主催しているバレーボール「監督が怒ってはいけない大会」。2024年1月の福岡大会に、空手家の清水希容さんやバドミントンの栗原文音さんらアスリートが参加し、一緒にバレーボールをしたり、トレーニングのアドバイスをしたりしました。大会では能登半島地震被災者支援の募金も実施し、多くの寄付をいただきました。

「日本の未来を応援したい」との思いを寄せられた遺贈寄付が活動を支えています。



本事業は水野久栄様からの遺贈寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／37,000,000円（支援額37,000,000円）



発達特性や虐待トラウマ等を持つ小学生を対象としたフリースクールの建築

事業内容

発達特性や虐待トラウマ等を持つ子ども達を対象とするフリースクールを建築するための支援を行いました。



親からの虐待によるトラウマや発達障害などが原因で学校に通いづらい子どもたちがいます。そんな子どもたち一人一人のニーズに対応できる人材と空間を確保し、子どもが落ち着いて学べる居場所をつくりたい。公立や私立の学校とは異なる「新たな選択肢の学校」として札幌市内で計画された「むぎのこエレメンタリースクール」建設を支援しています。約3億5千万円の事業費は全額、「子どものために」などの希望を寄せた8人の方からの遺贈寄付で賄います。早ければ2025年春には完成の予定です。

スクールは、札幌市内で児童発達支援センターなどを運営する社会福祉法人麦の子会が建設・運営を担います。敷地面積約500平方メートルに木造2階建の校舎を建て、最大で小学生100人を受け入れる計画です。教室やカフェテリア、テラスだけでなく、パニック症状に対応するために、気持ちを落ち着かせる場所として「カームルーム」を各階に設置します。

「教育・福祉・医療」の連携を目指し、スタッフのソーシャルワーカーらが児童の心理的ケアをするほか、自治体や児童相談所とも連携し、必要に応じて保護者の心理的ケア支援もします。子どもが自ら学ぶ意欲を失わず、地域や社会から孤立しないために、これからも多様な居場所を確保していきたいと日本財団は考えています。



本事業は石川三枝子様、水野久榮様、森本寿み子様、I様、M様、M様、S様からの遺贈寄付と、K様の相続財産寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／352,890,000円(支援額352,890,000円)



看護師・介護士対象のユマニチュード・ケア技術研修

事業内容

看護師・介護士を対象としたユマニチュード・ケア技術研修を実施するための支援をいたしました。



認知機能が低下した人への効果的なコミュニケーション・ケアの技法に、フランス生まれの「ユマニチュード」があります。ケアする相手に対し「あなたを大切に思っている」とわかるように伝えるために「見る」「話す」「触れる」「立つ」を「ケアの4つの柱」と名付け、ケアを一つの物語のように一連の手順で完成させる「ケアの5つのステップ」で構成されています。

ユマニチュードの普及に取り組む一般社団法人日本ユマニチュード学会が、看護師・介護士等70名を対象に2024年2月に実施した技術研修会の開催費用約500万円を支援しました。小檜山公一様と杉本浩三様の遺贈寄付を活用させていただいています。

今回は、ユマニチュード開発者の一人、イヴ・ジネストさんが技術を直接指導。さらに正規インストラクター1人につき受講生4～5人が小グループで実技研修を受けました。立位介助、歩行介助、シーツを使った移動、体位変換、オムツ交換の技法などを実際に体験しながら学んだ参加者からは「早く自分の職場で実践してみたい」という声が上がりました。

日本は今後一層、高齢化が進み、認知症の方が増えていくと予測されています。日本財団はこれからもこうした機会を支援することで、現場での実践力の向上、質の高い看護師・介護士の養成につながることを願っています。



本事業は小檜山公一様、杉本浩三様からの遺贈寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／4,996,105円(支援額4,994,785円)



能登半島地震における 水循環型シャワーの配備事業

事業内容

2024年1月1日に発生した能登半島地震の被災地に
水循環型シャワーを配備する事業への支援をいたしました。



能登半島地震では上下水道が大きな被害を受けました。長期にわたる避難生活を少しでも快適に過ごしてもらうために、また感染症予防の観点からも石鹸を使うことができる手洗いスタンドやシャワーシステムが不可欠です。そこで日本財団はWOTA株式会社と連携し、排水を再生して循環利用できる安心・安全なポータブル水循環型シャワーシステムなどを被災地に緊急で届けました。

日本財団では被災地に直接物資を輸送するための方法としてRORO船を利用した海上輸送による支援を発災後約1か月間にわたって実施しました。RORO船の特徴は支援物資をトラックごと輸送し港から直接避難所などへ搬入することが可能なことです。第1便は1月10日に金沢港から出発し輪島港に入港、避難所となっていた特別養護老人ホームなどに発電機や燃料を輸送し、その後も珠洲市内の避難所となっている蛸島小学校などに物資輸送を継続し、約1か月のプロジェクト期間中に合計8回の海上輸送を行いました。輸送した物資は発電機、燃料類、車両、シャワーシステム、手洗いスタンドなどで、被災自治体等と連携の上でニーズを調査し調達したもので、さらに、シャワー時などに必要なタオル約8,000枚も、愛媛県今治市の企業から寄贈を受けて珠洲市内の避難所に届けました。能登半島全域においてシャワーシステムは100台、手洗いスタンドは200台にまで拡大しました。このうち25台のシャワーシステムとそのメンテナンス費用として、日本財団に使い道を一任いただいていた6人の方からの遺贈寄付を活用させていただいています。



本事業は黒澤泰子様、杉本浩三様、南雲滋朗様、I様、I様、M様からの
遺贈寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／178,200,000円(支援額178,200,000円)



日本財団 夢の奨学金

事業内容

社会的養護のもとで暮らした若者たちの
進学に対する給付型奨学金事業です。



児童養護施設や里親家庭など社会的養護のもとで暮らした経験がある若者は、高等教育への進学率が全体平均よりも低く、中退率も高い現実があります。経済的理由やサポートする大人が身近にいないことが原因といわれます。

そこで、専門学校や大学、大学院の入学金、卒業までの授業料全額、生活費、住居費、留学費用などを給付するだけでなく、ソーシャルワーカーが進学や就職をサポートする伴走型支援をして孤立を防ぐのが本事業の目的です。今年度は、子どもへの思いを託された2人の方からの遺贈寄付を活用させていただきました。

毎年度末、奨学金を受けた学生による報告会が開かれます。2023年度は8人が卒業。ちょうどコロナ禍で大変だった学生時代ですが、研究やアルバイト、留学、ボランティア活動などそれぞれに貴重な経験ができた時間だったと振り返りました。新年度から看護師となる学生はお金の心配をせず学業に専念できたことで「暗い中に光が射し、プレッシャーから解放された」と喜びを語りました。地方公務員になる学生は「無限の可能性や楽しさに気がつくことができました。一人でも多くの子どもたちに生きていてよかったと思ってもらえるよう貢献したい」と児童相談所への配属を希望していました。

事業は2016年からスタートしてこれまでに延べ116人を支援。28人(2024年3月時点)が奨学生として在籍しています。やる気も能力もある、しかしチャンスだけがないという社会的養護出身の若者にとって、意志あるお金が希望になっています。



本事業は石田昌子様からの遺贈寄付と佐藤正夫様の相続財産寄付の
活用を決定いたしました。

●事業費総額／60,943,567円(支援額60,943,567円)



高齢者のための 「もうひとつの家」の整備

事業内容

高齢者のための「もうひとつの家」の整備事業への支援を決定いたしました。



人生の最期を自宅で迎えたいと考えても、家庭の事情などから必ずしも望みが叶わない現実があります。日本財団は、高齢者が住み慣れた地域で最後まで暮らせるように支え、看取りまで対応する社会の実現を目指して「もうひとつの家プロジェクト」を2021年度から開始しています。今年度は、長崎県島原市で介護相談や子ども食堂などを実施している一般社団法人まざーりーふあいらが、市内に開業する「みんなのいえ あんだんて」の整備事業を支援しています。

「もうひとつの家」は介護施設ではありません。地域との関わりを保ちつつ、入居者の尊厳ある生活を保障することを重視した「住まい」です。24時間対応可能な職員が最低1人以上いて、訪問介護や訪問診療などと連携しながら、入居者が望めば最期まで暮らせる場です。支援の際には、年齢や要介護度、家族の有無、疾病や障害に関する制限を設けず受け入れることや、原則個室で自然を感じる空間があることなども条件としています。

「あんだんて」は築61年の木造平屋建ての民家を借りて改築します。敷地面積は約370平方メートル、延床面積約75平方メートル。定員は5人。この整備費と初年度の運営費6か月分、計約2千万円を遺贈寄付で支援します。

誰もが必ず死を迎えます。だからこそ、誰もが少しでも安心して最期を迎えられる。そんな社会を目指したいと考えています。



本事業には〇様からの遺贈寄付の活用を決定いたしました。

●事業費総額／20,290,000円（支援額20,290,000円）



能登半島地震に関わる 支援活動（（一財）日本笑顔プロジェクト）

事業内容

能登半島地震被災地で浸水被害を受けた家屋の土砂を撤去したり、シート張りなどの応急処置を施す活動を支援いたしました。



地震や大雪といった緊急時に重機を使った復旧支援や、食料などの救援物資を被災地に届ける活動を2011年から展開している一般財団法人日本笑顔プロジェクト。能登半島地震でもプロジェクトはいち早く動きました。震災発生当初から石川県内で継続的に活動が続けていますが、このうち石川県珠洲市で浸水被害を受けた家屋約50軒の土砂を撤去したり、シート張りなどの応急処置を施したりした際の費用を助成しました。遺贈寄付が原資です。

プロジェクトは、長野県小布施町にある浄光寺（真言宗豊山派）副住職、林映寿さんが始めました。お寺のネットワークを活かし、全国に37か所の支部があります。企業と協定を結び、いざという時には食料の供給を受けるほか、移動手段としてヘリコプターやキャンピングカーの利用もできるようにして迅速に動ける体制を構築しています。

これまでも、2020年12月から2021年1月にかけて北陸地方を襲った寒波の影響で、高速道路や国道で立ち往生した車への支援活動をATV四輪バギー（全地形対応車）やスノーモービルで実施するなどの実績があります。日本財団では、発災後の緊急支援が有効に活用されるよう、こうして平時から備えている団体との連携を一層深めるなど、これからも「災害に最速で、最適に動く」を大切にして様々な災害復興支援を行っていきたいと考えています。



本事業は上野夏子様からの遺贈寄付と山口好人様（故人）の相続財産寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／2,959,700円（支援額2,900,000円）



使い捨てプラスチックごみ 削減プロジェクト『HEROs PLEDGE』

事業内容

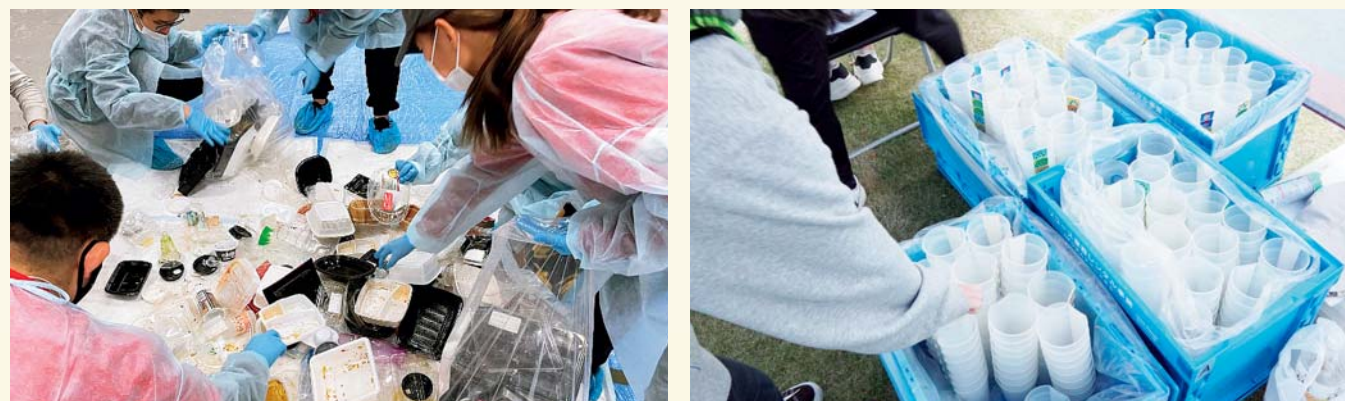
スポーツ界横断の使い捨てプラスチックごみ削減プロジェクト『HEROs PLEDGE』に活用させていただきました。

日本財団が推進する、アスリートによる社会貢献活動「HEROs」プロジェクトに2024年3月、新たな活動「HEROs PLEDGE」が加わりました。スポーツ界全体で使い捨てプラスチック削減に取り組み、主要スポーツの興行における使い捨てプラスチックごみの半減を目指すプロジェクトです。活動原資に遺贈寄付が使われます。

地球温暖化問題は、例えば猛暑や雪不足で競技ができない状況を生みつつあるなどスポーツにも大きく影響します。使い捨てプラスチックはその製造や廃棄の過程でCO2を発生し地球温暖化の一つの原因となっているだけでなく、海洋汚染の主要な原因にもなっています。スポーツ界は大量の使い捨てプラスチックごみを出している側でもあります。アスリートも環境問題を考え、行動することは避けられません。

アスリートや競技団体に活動への参加を呼びかけて使い捨てプラスチック削減のモデル事例をつくるとともに、一般の人や企業にも協力を求め、環境問題に関する勉強会や視察会、関連イベントなどを実施していきます。既に「#HEROsPLEDGE」でInstagramやXに投稿された、ごみ削減の取り組みやアイデアをプロジェクトのHPで掲載しています。

スポーツには多くの人たちを巻き込むチカラがあります。社会課題を解決するには多くの人たちの取り組みが不可欠ですが、まずその一歩を踏み出してもらうために、アスリートたちが立ち上がっています。



本事業は上野夏子様、杉本浩三様、松山映子様、I様、O様、Y様からの遺贈寄付を活用させていただきました。

●事業費総額／68,500,000円(支援額68,500,000円)



シンポジウム 「人生100年時代における幸福感を考える」 を開催しました

遺贈寄付を考える世代を対象に、人生100年時代といわれる超高齢化社会を迎えた日本においていかに長寿を前向きに捉えるか、人生の後期にどのような選択をすれば豊かな人生を送り幸福感を得られるのかをテーマに、シンポジウムを開催しました。

シンポジウムでは「人生100年時代」の言葉の生みの親でもあるロンドン・ビジネス・スクール教授のリンダ・グラットン氏による基調講演に続き、幸福学研究の第一人者、慶應義塾大学教授の前野隆司氏、脳科学者の茂木健一郎氏、モデレーターにジャーナリストの国谷裕子氏をお迎えして、パネルディスカッションを展開しました。人生の営みのなかで自らを変化させていくことや社会貢献を念頭においた利他の心持ちの啓発や人間関係の大切さが説かれました。

会場には200名を越える皆様にご参加いただきましたが、参加者の満足度が98%を超えるなど、シンポジウムは盛況のうちに終了しました。

今後も遺贈による寄付文化の醸成に向けて、様々な情報発信を続けて参ります。



シンポジウム詳細

開催日時：2023年12月1日(金)13:00～15:00

開催場所：笹川平和財団国際会議場

主催：日本財団

後援：内閣府、厚生労働省、日本弁護士連合会、日本司法書士会連合会、日本行政書士会連合会、日本公証人連合会、三井住友信託銀行、三菱UFJ信託銀行、りそな銀行、埼玉りそな銀行、三井住友銀行、あおぞら銀行

YouTube配信

パネルディスカッション並びにシンポジウムの様子は、日本財団公式 YouTube チャンネルにて配信しております。



【ダイジェスト版】



【フル版】

全国で「遺言・遺贈セミナー」を開催しました

2023年度は東京、神奈川、千葉、埼玉の一都三県を皮切りに、札幌、仙台、静岡、名古屋、大阪、広島、福岡といった全国主要都市にて「遺言・遺贈セミナー」を開催しました。

各地のセミナーでは相続遺言専門行政書士 佐山和弘先生の他、遺贈実務に携わっていらっしゃる専門家講師に講演をいただいた後、日本財団遺贈寄付サポートセンターの取組についてご紹介いたしました。また、新たな試みとして、金融機関や終活団体などと連携したセミナーや地元メディアとタイアップしたセミナーも開催しました。各回とも活気溢れるセミナーとなりました。多くの皆様から思いを直接お聞かせいただく絶好の機会となりました。

今後も参加される皆様のニーズに沿ったセミナー開催に注力して参ります。



第8回 ゆいごん川柳キャンペーンを実施しました

日本財団では、家族や大切な人と遺言について話し合う機会にしてみたいとの思いから、1月5日を「遺言の日」に制定し、ゆいごん川柳の募集を通じて遺言の大切さを発信しています。AIなど世相を反映した作品や夫婦の愛を言葉に託した作品など、15,313作品の応募がありました。また前回に続き、三井住友信託銀行様、三菱UFJ信託銀行様に特別賞を設けていただきました。

選考委員には、落語家の桂ひな太郎さんや相続遺言専門行政書士の佐山和弘氏他が参画され、大賞1作品、入選3作品、佳作6作品、特別賞2作品の計12作品が選ばれました。

ゆいごん川柳×お笑いイベントを開催

ゆいごん川柳の周知を目的に「春爛漫！お笑いライブ」を2024年3月13日に日本財団ビルで開催しました。受賞作品を紹介し、落語や紙切り他プロの演芸を楽しみながら、遺言について考えていただく絶好の機会としました。



ゆいごん川柳スタディーツアーを実施

初の試みとして、遺贈寄付が活用される場を実感いただくため「ゆいごん川柳スタディーツアー」を開催しました。

入賞者の一部が、宮城県石巻市の公益社団法人 MORIUMIUS (モリウミウス) 様を訪問し、「食」や「人」との繋がりを感じながら子どもの生きる力を育むプログラムに遺贈寄付が活かされている現場を視察しました。参加者から、「ひとりひとりに伝わる事業として遺贈寄付が活かされていることを実感した」、「考えるだけではなく、遺言書を書いて法務局に預けようと思った」という声が寄せられました。



大賞 我が子なし 母なる地球に 遺贈する ヒジキさん 50代/東京都	入選 行間に 介護のお礼 にじみ出る きつねダンサーさん 50代/大阪府
入選 遺言書 一日延ばしで 認知症 鶴の長命さん 70代/東京都	入選 AIに 自分で書けと 叱られる 風まかせさん 60代/群馬県

佳作

遺言は死ぬ前よりも ボケる前
jumarosaryさん/50代/広島県

遺贈寄付 決めた自分を ちょっと褒め
森みのりさん/60代/神奈川県

幸せを 子孫に分ける 遺言書
章香堂さん/60代/富山県

愛してる 初めて言えた 遺言書
く〜さん/40代/千葉県

ありがとう あなたとだから 生きられた
Maiさん/30代/佐賀県

書き終えて 安心したか 余生延び
江戸川散歩さん/70代/千葉県

特別賞 三井住友信託銀行賞

ゆいごんの 向こうに父の 生真面目さ
かずちゃんさん/60代/兵庫県

特別賞 三菱UFJ信託銀行賞

共に逝く 約束破り 筆を取る
竜宮の使いさん/70代/兵庫県

私たちについて

担当理事 笹川 順平

ドネーション事業部 部長 木田 悟史

遺贈寄付サポートセンター事務局

チームリーダー 木下 園子

リーダー
(五十音順) 工藤 貴子
佐々木 秀仁

相談員
(五十音順) 窪内 栄子
佐藤 恵子
林 勝己

顧問

弁護士 鈴木 大輔 氏
(東京リベルテ法律事務所所属)

執筆協力

星野 哲 氏
(立教大学社会デザイン研究所研究員)

編集後記

わが国でも遺贈寄付文化が徐々に浸透していく中、2023年度の遺贈寄付の活用実績などについて、ご報告申し上げることができました。ご協力いただきました皆様に感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。本報告書は事業決定の年度で括ってご報告しておりますが、建物未完成などの事業につきましては、完成後適宜ご報告させていただきます。

新型コロナウイルスが5類に移行し、その他の活動欄にも記載の通り、2023年度は対面のシンポジウム「人生100年時代における幸福感を考える」を開催することができました。登壇者が繰り返し話された「利他の心持ち」を遺贈寄付の形で遺していただいた多くの皆様に、改めまして心より御礼申し上げます。

お問合せ先

0120-331-531 通話料無料

9:00~17:00(月~金/土日祝日を除く)

日本財団 遺贈寄付サポートセンター
〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2

<https://izo-kifu.jp/>

